家庭や事業所から排出され、下水処理センターに流れてくる下水の合計量は、1日約6万7千立方メートル。これは家庭内の浴槽に換算すると約22万3千杯分に相当します。この下水は約15時間かけ、たくさんの工程を経て、自然に戻してもよいきれいな水になります。

ここでは、下水がどのように処理されるのか、下水道の仕事を簡単にご紹介します。

気象災害を契機に

苫小牧市の下水道事業は、今から60年前の昭和25年8月の集中豪雨による気象災害を契機に、翌年から事業計画に着手したことに始まります。昭和27年に浜町（高砂）処理区の管渠（下水道管）工事が始まり、昭和32年には浜町処理場（現在の高砂下水処理センター）の建設など、施設整備が徐々に進められ、昭和34年からは道内初となる終末処理場の運転を開始しました。

その後も生活環境確保と安心・安全の確保の為に、街の発展に合わせて計画的な整備を行っています。

平成21年度末での汚水の下水道普及率は98・8％と、全国的にも高い水準となっています。

総延長1千379km

普段目にすることのない下水道管ですが、家庭から出る汚水を下水処理センターまで運んだり、雨水を川や海へ流す大事な役割を果たしています。下水道建設課では、この下水道管の設計から工事の監督までを行っています。

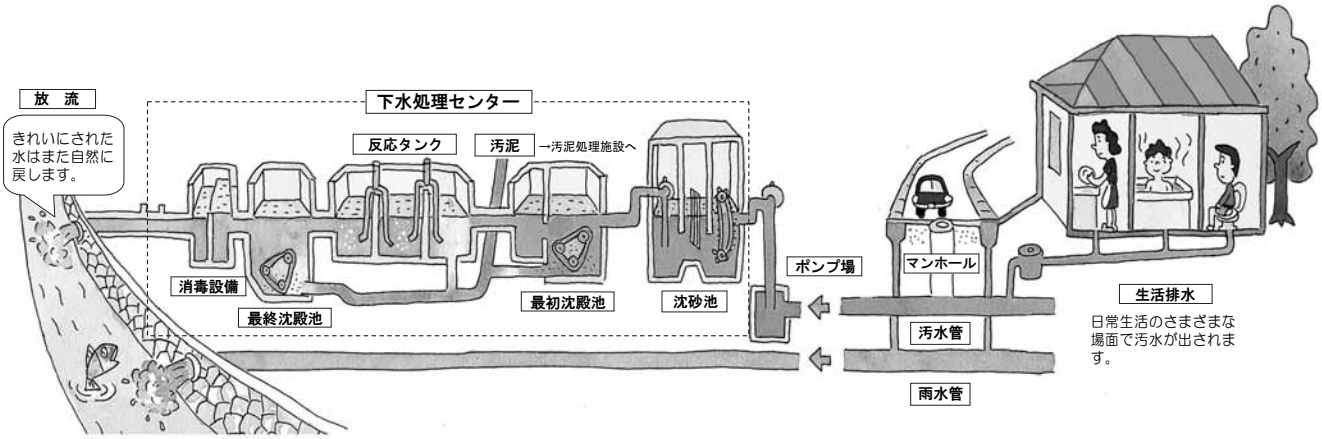
昭和27年から整備が始まった下水道管は、平成21年度末までに総延長1千379kmに及んでおり、この長さは鉄道に換算すると苫小牧駅から静岡県磐田駅付近までの距離となります。

汚水管や雨水管の整備の他に、これまで汚水と雨水を同一の管で下水処理センターへ送っていた地域を、汚水は下水処理センターへ、雨水は川や海へそれぞれ分けて流す合流式下水道改善事業を進めています。

重要なライフライン

市民生活に不可欠なライフラインの一つである下水道機能を維持するため、計画的に下水処理センター・中継ポンプ場・下水道管などの改築や更新を進めています。

下水道施設は古いもので50年以上経過しており、老朽化に伴うトラブルを未然に防ぐため管路施設の点検調査や、堆積物除去のための清掃を行っています。

以上のような、事業（計画）の推進・予算確保の他、開発行為における下水道施設に関する指導を下水道計画課で行っています。

昭和25年の集中豪雨のようす